

よみさんぽ

大宮見沼

第12号

写真家 野回勝宏

やどかりの里発！ 地域発見マガジン

特集

「みぬま」の未来に思いを馳せて

編集 公益社団法人やどかりの里「大宮見沼よみさんぽ」編集委員会

特集

「みぬま」の未来に 思いを馳せて

毎年10月、さいたま市を舞台に音楽やダンスパフォーマンス、地域物産展など盛大に開催される「ガッツさいたま」をご存知でしょうか。主催は「ガッツみぬま実行委員会」。ここ「みぬま」の地を元気に！という思いのもと、地域活性化を目的に立ち上げられた市民団体です。今回は、実行委員会副会長である小川由佳さんにお話を伺いました。

小川 由佳さん

(ガッツみぬま実行委員会副会長)



被災地支援から地元への思いを強く

市内の飲食店に勤務されている由佳さん。実はジャズシンガーというもう1つの顔があります。

「ジャズに出会ったのは約10年前。人との出会いからジャズや音楽の世界を知り、魅力を感じて歌を始めました。同じ曲でも演奏者によって表現の違いがあることが、ジャズの魅力だと思います」と由佳さん。

そんな彼女が音楽を通じて知り合ったのが斉藤晃子さんでした。現在ガッツ

みぬま実行委員会（以下、ガッツみぬま）の会長を務めている斉藤さんは、仕事の傍ら、ポップスシンガーとしても活動されています。由佳さんと斉藤さんはともにさいたま市在住。そして実は親同士、また由佳さんのご兄弟も斉藤さんとお知り合いだったという、縁深い2人だったのです。

そんな2人がガッツみぬまを発足したのは今から3年前、2012（平成24年）のことでした。背景にあったのは、地元・さいたまを元気にしたいという強い思い。東日本大震災後、ご家族や友人と被災地へボランティアに訪れていた由佳さんは、故郷のさいたまを思ったといいます。

「被災地では、個人宅のヘドロのかき出しなどを行っていました。現地の方に欲しいものを聞き、『今は楽しい時間が欲しい』と言われた時には、楽器とバーベキューセットを持参して、漁港などでライブをしながら、集まった人たちに音楽と食事を提供しました。被災地支援の中で、生まれ育った場所がなくなってしまう悲しみに触れました。同時に、自分の育ってきた地を改めて考える機会を与えてもらったのです。生まれ育った場所・さいたまについて、当たり前すぎて見えていなかったことを改めて知りたい、もっといろんな人にさいたまのことを知ってもらいたい……そして次世代のことも考えるようになり、景観を綺麗にすること、楽しく過ごせる場所であって欲しいという願いが生まれてきました。そこで斉藤さんといっしょにガッツみぬまをつくったのです」

本来の「みぬま」の広大な土地を示す意味で、ガッツ「見沼」ではなく「みぬま」という表現にもこだわりました。

秋の一大イベント・ガッツさいたま

ガッツみぬまが行う主要な活動の1つが商店・企業や地域団体とともに開催する盛大な秋の祭典、「ガッツみぬま」。2012年、大宮第三公園を会場に、音楽イベントや物販ブース、ハロウィン仮装と盛りだくさんの内容で初開催となりました。地元でのつながりを活かし、当日は来場者4,000人という大イベントとなったのです。「実行委員会も最初は少人数で、イベントの会場設営、機材、運営……技術者の方に教わりつつ、すべてが勉強しながらのスタートでした」と振り返る由佳さん。翌年（2013年）の「ガッツみぬま」では告知をていねいにしたことで人が人を呼び、来場者は8,000人へと倍増しました。

そして昨年（2014年）、さいたま新都心のけやき広場へと会場を移し、イベ

ント名もこれまでの「ガッツみぬま」から「ガッツさいたま」へと変更。

「“みぬま”は本来広大な地域を指しますが、見沼区など狭い範囲で捉えられることも多いのです。このイベントは広範囲の人に応援してもらっているということと、埼玉の中央、新都心での開催ということで、『ガッツさいたま』としました。昨年は悪天候のため一部イベントを縮小しましたが、その中で開催できたことは、1つ大きなステップになったと思います」

見沼田んぼに世界一の桜並木を

上尾市、さいたま市、川口市を流れる見沼代用水。その西縁と東縁には桜並木が続いています。一部途切れている部分をつなげ、全長20kmの桜並木にしたいとガッツみぬまが始めたのが「桜ロードプロジェクト」です。「見沼に桜を植える会」とともに、桜の苗木の植樹を始めました。

「寿命が長いことで知られる江戸彼岸桜を中心に、地元の企業や商工会、学校などと協同し、これまで84本を植樹しました。現在、それを後押しするように、さいたま市でも『目指せ日本一！サクラサク見沼田んぼプロジェクト』が始まっています。これは市民や団体、企業に寄付を呼びかけ、桜の植樹を行うものです。ガッツみぬまだけでなく、『見沼に桜を植える会』会長の渋谷佳孝さん（さいたま市議会議員）の地道な活動が、市を動かしたのだと思います」

桜ロードプロジェクトの活動が認められ、昨年、みどりの保全や緑化の推進のため地域で活動している人たちを表彰する「さいたま市みどりの功労賞」を「見沼に桜を植える会」「さいたま商工会議所青年部」と連名で受賞しました。

みぬまの地に牧場を

秋の祭典、桜ロードプロジェクトとともにガッツみぬまが進めているのが、馬と共存できる街づくり「ガッツ牧場」の取り組みです。見沼田んぼの農地を活かし、馬のいる光景をみぬま全体に広げたい、そして都市と自然が共存する地域をつくろう、という思いで始まった活動です。市内の牧場を借り、子どもたちが馬に触れ合えるイベントを開催しています。



「自然の中で動物と触れ合える場所があったらと思うんです。昔は見沼田んぼにも馬がいました。またそういう地域にできたらなという思いがあります」

仮装でウォーキング!?

3月28(土)、29日(日)、さいたま観光国際協会などが主催する「さいたまーチ 見沼ツーデーウォーク」が開催されます。さいたま新都心を出発し、自然に親しみながら5km、10km、30kmの各コースを歩く企画です。

「この中で、仮装して歩いてもらえないかと観光協会さんに声をかけてもらいました。ちょうど私たちも、桜が咲く時期にのんびりとしたイベントをやりたいと思っていたので、コラボ企画を考えているところです」と由佳さん。華やかな衣装で歩く姿を見かけたら、それはガッツみぬまの皆さんかもしれません。

そこに確かなものがあるから……

現在、実行委員は10人前後。皆さん仕事をしながらの活動で、全員が集える機会は年に一度あるかないかだそうです。

「みんな仕事や家庭があつてたいへんだけれど、それでも『やる』という思いになるのは、そこに確かなものがあったからだと思います。活動が続ける中で、私たち自身“みぬま”は文化、歴史のある土地なのだと改めて知るきっかけにもなりました。川、田畑、神社……すべてのバランスが良く、のんびりとした時間が流れる場所、それがみぬまの良さだと思います。その良さを活かし、自然と共存しながらよりよい地域をつくっていかれたらと思っています」

そのために、まずは「ガッツみぬまの活動をもっと多くの人に知ってもらいたい」と話す由佳さん。そしていつかは、桜並木に囲まれたみぬまの地に、地域の人が憩う公園や牧場をつくり、地域の人に親しんでもらえる場を実現したい、という熱い思いをもたれています。

私は「みぬま」に越して丸4年になりました。「みぬま」の未来に思いを馳せ、活動する人たちがこんなにもたくさんいる……それが何だか誇らしく、嬉しいのです。私もその輪の中にありたいと思う、今日この頃です。

(記 萩崎 千鶴)

やどかりの里の仲間たち・11

ボランティアは、誰かの ためでなく、自分のため

宮内三佐子さん



見沼区南中野にある「すてあーず」で、布製品の製作を中心に作業を手伝ってくれているボランティアの宮内三佐子さん。優しい笑顔が印象的な女性です。

宮内さんとやどかりの里との出会いは7～8年前。地元の中学校の相談員を辞めたばかりの頃、近所に住むやどかりの里の職員から「手伝ってくれない？」と声をかけられ「あゆみ舎」（大宮区）で働き始めたことがきっかけでした。

あゆみ舎では内職作業が中心でしたが、中でも楽しかったのはランチづくり。作った料理を職員とメンバーとで和気あいあいと食べることが楽しみだったそうです。ある時、何人かで楽しく話していたら、隣の部屋にいたメンバーが急に怒り出したのです。宮内さんたちは楽しく話していただけのつもりが、仲間外れにされたと感じて怒っていたことが後からわかりました。その時に、人との関係に、より敏感なところがあるんだなと感じたそうです。退職後は、4年前からボランティアとして「すてあーず」に関わってくれています。

「ボランティアは、誰かのためでなく、自分のためなんですよ」とにっこり笑う宮内さん。やどかりの里以外にも、いろいろな団体に活動されています。その行動力の源は「声を出さなきゃ変わらない」という思い。以前、学童保育所で20年勤めた宮内さんは、運動で学童保育の充実を果たしてきました。その時に、自分たちで声を上げることの大切さを実感したと語ります。障害を自己責任として負担を課す障害者自立支援法の反対集会にも参加されました。障害を抱え、社会的に弱い立場にいる人たちが、日比谷野外音楽堂をいっぱいにして声を上げている場を共有し、声を上げることの大切さを改めて感じたといいます。

運動は、すぐに結果が出るものではありません。でも、日々の活動だけでなく、運動の大切さを実感しながら応援してくれる宮内さんの存在は、まさに私たちの応援団。その存在に力をもらいつつ、また今日も頑張ろう！（記 宗野 文）

よみさんぽ 日誌

活力ある地域づくり つくしんぼの会



やどかりの里エンジュが1997（平成9）年に配食サービスを始める際の開所準備や、やどかりの里バザーへの協力、そして定期的に行われる配食サービス連絡会で交流を持つ南中野で活動が続ける「つくしんぼの会」をご紹介します。

「つくしんぼの会」は、「地域で安心して生活ができるように」をテーマに1985（昭和60）年から南中野で活動を開始し、今年で30年目になる活動団体です。地域の人に「あそこに行けば何かある」と思われるような場所にしたいとの願いで、今日までいろいろなことを手掛けてきました。今では毎月第2、3、4水曜日は夕食配食サービス、毎週火曜日はミニデイサービス、第3木曜日に地域包括支援センターと一緒にサロン活動を行っています。

この日は火曜日、木造の民家を利用した小規模なデイサービス、「ゆっくり、一緒に、楽しく」を基本に、お年寄りのペースに合わせて昼食を囲みます。おしゃべりや折り紙作成、アコーディオンとオカリナの演奏に合わせてみんなで唄い、体を動かすなど楽しく元気なひと時を過ごします。お年寄り1人1人の日頃の様子をじっくりと聞き、暮らしや健康に問題が起きていないか、気を配りながらさりげなくニーズの把握をされていることが伝わってきました。

私は14年のお付き合いですが、初めて活動の場にお邪魔しました。会の活動は、支えられる側、支える側という立場を超えた友人、隣人という関係を築いており「その人らしく過ごしてもらう」「その人らしい生き方・生活」を大切にしています。障害があってもなくても、住み慣れた地域でその人らしく自立した生活を送るためには、地域での支え合いが必要不可欠です。身近な活動に関心を持つことが、支え合う仕組みづくりにつながるのではないのでしょうか。

今回活動の場にお邪魔して、自分の人生を豊かにするだけでなく、活力ある地域づくりが身近にあったことに、心がホッとしたひと時でした。（記 金子 猛）

あの街 この街 俊一郎が行く・6

子どもの頃に帰る場所

気がつけば新年

こんにちは！連載を開始し、あっというまに1年が過ぎましたが、今年もよろしくお祈いします。ふとした時に月日の流れのはやさに驚くのですが、久しぶりに田舎の家に行った時に、年単位でそれを実感することがありました。

祖父と私と田舎のこと

その田舎は祖父の故郷で、祖父が退職後に建てた隠居屋敷と私の両親が建てた小さな離れがあります。春には水田の水鏡が美しく、夏には^{せみしくれ}蟬時雨、秋はイナゴ採り、冬には澄み切った空に無数の星を見上げて圧倒される世界。下町生まれの私にとっては、常に新鮮な体験を与えてくれる場所でした。しかし、海に近いわけでもなく、目立った観光地もない^{のどか}長閑な田舎の存在は、私の中でだんだんと薄らいでいきました。離れのほうは、気がつくと行かなくなって4年以上の月日が流れていました。祖父も、ひと月の半分を田舎で、残りの半分を東京の叔母の家で過ごす日々を続けていました。しかし卒寿を過ぎ、以前は1人で来る事ができた田舎もなかなか通うのが難しくなると、最近、叔母から聞くようになりました。折しも、私が住んでいる下町で空き家問題の調査に関わっていますが、自分自身がその問題の一部となっていることへの懸念がわき起こり、意を決して長らく訪れることのなかった田舎に行くことにしました。

久しぶりの田舎

スリー・ツー・ワン……恐る恐るドアを開けてみると、やはり微かに空き家独特のカビ臭いにおい。大震災の時に倒れたのか、床に転がるテレビ。しかし、冷静に見ると20年を超え、長らく来ることがなかった割には、建物は



とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。
エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）
を複数行う。（写真 新 良太）



しっかりしています。大掃除、カビてしまった布団などの処分、そこからまた大掃除……そして、親戚や近隣への挨拶に出かけ、行く先々で、久しぶりの私を笑顔と畑の幸で迎えてくれました。帰り道、子どもの頃とは異なり、閉店した商店だらけの通りを抜け、人々の笑顔とはうらはらに町に寂れた印象を感じ、ここでの自分の存在と、この集落の未来が見通せないことへの不安を感じました。

家々の集合体が町をつくる

職業柄、個々の建物について検討し、議論する機会は多く、それらいずれの建物も、人が居て、町が成立しているからこそ、それぞれの場所に存在し得ています。小さなものの集合体であっても、その個々があるから町になっている。縁あって、私はこの田舎町の一部となっています。便利な所ではなく、特別人に自慢したくなるような風景や施設があるわけでもありません。でも、嫌いではないこの田舎の家、これからはちょいちょい来てみよう。色々と勝手の違うこともあるだろう。しかし、気負わず長くつきあってみよう。

愛おしい風景

近くにある集落の神社、普段は板戸に閉ざされていて人の居ない境内が、大晦日になると賑わいます。子ども時代の記憶になりますが、かがり火の中、多くの人が初詣に訪れる光景は普段の印象とは大きく異なり驚かされます。賑やかさと朗らかさを包む凜とした空気が心地よい印象を与えてくれました。いずれまた味わいたいと思う、私にとって愛おしい風景です。



あなたの街のやどかりさん

見沼区障害者生活支援センターやどかり

安定した暮らしへの第一歩に

見沼区障害者生活支援センターは、2006（平成18）年に活動を開始しました。働くことや経済的なこと、障害を抱えて暮らす中で困っていることなど、生活に関するさまざまな相談が日々寄せられます。今回はそういった相談の中から、1人の女性の声をご紹介します。

「家族だけの暮らし」から抜け出すために

見沼区にお住まいで、2年前に初めて障害者生活支援センターに相談された三田さん（仮名）にお話を伺いました。

三田さんは障害のある息子さんたちと暮らしていました。自身も障害を抱えながら、家族だけで何年も支え合って生活してきて、「このままでは共倒れになってしまう。息子たちのためにも人とのつながりをつくっていききたい」という切実な思いから、障害者生活支援センターへ相談されました。障害者生活支援センターでは、ご家族の暮らしが少しでも安定したものとなるよう、家事の負担を軽減していくことや経済的な不安を取り除くこと、日中を孤立せずに過ごせる場など、困りごとを整理しながら一緒に考えていきました。今では、区の支援課の担当者とともに、通院先の医療機関の協力も得ながら、ご家族それぞれが自分の道を歩み出しています。

相談を開始してから、生活の安定が見えてくるまでに約2年の月日がかかりました。三田さんは、この月日を思い返しながら、「相談してよかった。家族以外のつながりがなく本当に必死でした。少しでも家庭の中に風穴をあけたいと思いました。こうして相談を続けてきて、息子たちがいろいろな人たちとつながったことが何より嬉しいです」と語っていただきました。

第 12 回

さいたま市では、各区に1か所、障害者生活支援センターが設置されています。前号のこのコーナーでは、浦和区障害者生活支援センターやどかりが紹介されました。引き続き、見沼区障害者生活支援センターやどかりをご紹介します。

地域の相談支援機関の1つとして

障害者生活支援センターに相談しても、さまざまな困りごとがすぐに解決するとは限りません。しかし、行政機関や地域の支援機関とも協力しながら、安心して安定した暮らしに向けて、一歩ずつお手伝いをしていきます。

地域には、障害のある人を支える社会資源や福祉制度があります。例えば、自分の体調を考慮し、日数や時間を調整しながら働ける就労支援事業所や、外出の機会や生活リズムをつくりたい、人と交流したいと希望する人たちが利用する日中の活動場所もあります。自宅にヘルパーが訪問し調理や買い物、掃除などの家事をサポートする制度もあります。また、区の支援課や保健センターも相談窓口の1つです。こうした制度や資源を活用して、住民の方に見守られながら暮らしている人がたくさんいます。

その一方で、障害による大変さを抱え、どうしてよいか分からず家族だけで悩んでいる人が少なくないと感じています。自分や家族、お知り合いの方のことなど、相談してみようかなと思った方は、お住まいの区の障害者生活支援センターにぜひご連絡ください。障害者生活支援センターにつながることで、安定した暮らしへの第一歩になればと願っています。（記 中村 由佳）

見沼区障害者生活支援センターやどかり

住所 さいたま市見沼区南中野 467-1
スガヤハイツ 105 号

TEL 048-682-1101

*やどかりの里が運営している3区の障害者生活支援センターはp15をご覧ください。



“ひと”を大切にする 街の自転車屋さん

岡本 節子さん (サイクルプラザタマキ)



見沼区南中野の商店会の一角に、30年以上に渡り「街の自転車屋さん」として営業しているお店があります。地域の人たちからは、「タマキさん」と親しみを込めて呼ばれ、自転車の購入、修理はもちろんのこと、店先ではよもやま話も繰り広げられます。今回は、街の自転車屋さん、岡本節子さんにお話を伺いました。

会社員から自転車屋へ

東京日本橋の会社で受付事務として働いていた岡本さんは、ご主人との結婚を機に自転車屋を開店しました。「自分がお店を開くなんて考えられませんでした。夫が何か商売をやりたいと言って、生活に身近なものと、自転車屋を始めることになったんです」と岡本さん。自転車の知識も修理経験もまったくなかったため、結婚前に自転車屋で半年間修行をしたそうです。中古自転車を仕上

げるため、自転車を磨き、初めての工具を持って技術を磨いたのです。そして、ご主人の名前を店名に使用して「サイクルプラザタマキ」を浦和区上木崎にご夫婦でオープンしました。今から34年前のことです。

見えないところに手を加える

オープンから2年後、現在の南中野に大宮店を開店。デリバリーの修理と、今ではあたりまえになったフリーダイヤルの導入もしました。

「大宮店で一緒に働いている男性は、働き始めて25年。自転車が本当に好きで、信頼できるパートナーです。今は店長としてお店のことを任せています。彼は、乗り心地を試したり、自転車の回転する“音”を聞き分けて修理もします。自転車が長持ちするために、そして、気持ちよく自転車に乗れるように創意工夫をこらしているのです」

質の良い自転車を提供したい

今は低価格で自転車を購入できる時代。岡本さんの店舗で取り扱っている自転車メーカーも、こうした販売競争で生産工場を国内から一部海外へ移しています。

「海外生産の自転車は、確かに販売価格は抑えられます。でも、日本製と同様に製造できるとは限りません。低価格の自転車はタイヤの厚みがペラペラだったり、回転部分が悪かったり、すぐに錆びてしまうものもあります。外見からは違いは分かりませんが、自転車の質が違います。どれを選んで乗るかはその人次第ですが、やはり自転車には長く乗ってもらいたいし、質の良いものを提供したいと思っています」

商店会の仲間としてのつながりを

また、岡本さんは南中野商店会の副会長も務めています。そんな岡本さんとやどかりの里とのおつき合いは、ドリームカンパニー（現すてあーず）が南中野商店会で営業を始めた頃に遡ります。当時の商店会の会計を岡本さんから引き継ぎ、それ以来、商店会仲間としてのおつき合いが始まりました。今では、やどかりの里のメンバーも岡本さんの店舗で自転車を購入するお得意さまです。

「やどかりの里とは、これからも商店会の仲間としてのつながりをつけたいです」と岡本さん。商店会の人たちからの信頼も厚く、とても頼りになる副会長です。

確かな技術と人への思い

大宮店オープンから30年が経過し、自転車業界の流れも変わりました。その中で、質の良い自転車を提供し続け、使用する人のために確かな技術で自転車修理に携わってきた岡本さん。そんな岡本さんの店舗には、多くの常連さんがいます。開店当初からのおつき合いのある人も多く、中には3世代に渡って交流のある人もいます。

「お店を営業していて、自転車の修理をしたお客さまから“ありがとう”と言われることが一番嬉しいです」と語る岡本さん。販売者―購入者の関係を越えたつながりが生まれる場でもあるのが、自転車屋「タマキさん」の何よりの魅力です。皆さんも、ぜひ足を運んでみてはいかがでしょうか。

（記 三石麻友美）

* サイクルブラザタマキ

さいたま市見沼区大字南中野 467-1
TEL 0120-373-196



営業時間 月～土 10.00-17.00
さいたま市大宮区天沼町 1-136-2

募集

- ☆作品展示したい方
- ☆雑貨販売したい方
- ☆貸しスペースあります

詳細は ☎ 048-657-0202

天沼1丁目
大宮駅
喫茶ルポース
スーパーバリュー
○ 大宮天沼店

埼玉県産小麦粉を使用 手づくりまんじゅう

まごころ

さいたま市中央区本町東 5-9-7
Tel. 048-857-2783 Fax. 048-857-2769



アートフルゆめまつり 2015 2015. 4.26 (日) 大宮駅周辺にて開催！

音楽とアートあふれる1日を♪

今年もやどかりの里からは「やどかりの里コーラス隊」の発表、作品展示、物販販売に参加します。詳しくは <http://www.aymo.jp/> まで



大切な衣類は安心安全の

クリちゃんマーク

のお店へ

クリちゃんマークはクリーニングの専門店のしるしです



春日ランドリー

〒337-0013 さいたま市見沼区新堤 152
東宮下団地 19-5

TEL 048-685-0811

**OA機器
事務機器**

オフィス用品

ソフトウェア のことなら

主な取扱商品

印刷機・複合機・FAX・事務用品・幼稚園ソフト



地域に根付いて36年

教育産業株式会社

<http://www.kyouikusangyou.co.jp>

さいたま市見沼区南中野301-1 TEL:048-685-0855
FAX:048-685-0726

こころの悩み、ちょっと話してみませんか…?

お住まいの区の障害者生活支援センターまでご連絡下さい



見沼区障害者生活支援センターやどかり

電話; 048-682-1101

大宮区障害者生活支援センターやどかり

電話; 048-795-4720

浦和区障害者生活支援センターやどかり

電話; 048-793-6373



～精神障害のある方、そのご家族の地域の相談機関です～



エプロン



学校グッズ



防災ずきん

布製品をオーダーメイド製作いたします!

お気軽にご相談ください。

1Fリサイクルショップ「すてあーず」営業中!

Tel/687-4483 (画)

公益社団法人 やどかりの里

すてあーず

南中野 844-22 イエローハウス
Tel/688-8223



新刊案内

やどかり出版 〒337-0026 埼玉県さいたま市見沼区染谷 1177-4 TEL 048-680-1891

JD ブックレット 1



私たち抜きに私たちの
ことを決めないで

藤井 克徳 編

JD ブックレット 2



病棟から出て地域で
暮らしたい

藤井 克徳 長谷川利夫
増田 一世 著

2014年6月 定価 1,000円

2014年9月 定価 1,000円



作者紹介

写真家 野口勝宏さん

のぐちかつひろ／1959年福島県生まれ。写真家「福島の花の美しさで世界の人々を笑顔にしたい」と花作家・橋本和弥氏とともに「Flowers of Fukushima」シリーズを制作。2014年開催された福島県観光キャンペーン「ふくしまプレDC」においてJR東日本のメインイメージに起用され、ポスターを始めラッピング車両や駅装飾を花の写真でビジュアルデザインし駅構内を明るくした。著書に「ここは花の島」などがある。同シリーズの作品は<http://noguchi.jp.com>にて閲覧可能。

表紙：スイセンとウメ

北風と春の兆しが交差するこの季節。

冷たい空気も冬の日差しも今までとはどこかが違っているよう。

大地から芽吹きの手感が立ち上ってきます。

題字 宗野文さん

学生時代から書道が大好きで、子育て中の今、我が子とともに習字に再挑戦中。やどかりの里の作業所「すてあーず」所長。見沼区南中丸在住。

大宮見沼よみさんぽ 第12号

発行 2015年1月（冬号）

編集 「大宮見沼よみさんぽ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<http://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里

理事長 土橋敏孝

印刷所 やどかり印刷

* 弁当の調理・配達パートさん募集

やどかりの里が運営しているまごころでは、日替わり弁当の製造・販売を行っています。昼食弁当の調理と配達をするパートさんを募集しています。（主な配達地域は中央区周辺）

曜日／木・金 時間／8:30～12:30

詳細は直接お問い合わせください。

まごころ（中央区本町東5-9-7）

TEL 048-857-2783（担当 ひやま 檜山うつぎ）

自分史や自伝を

本として残しませんか？

出版のプロが安心と信頼の技術を提供・サポートします

やどかり出版 さいたま市見沼区染谷1177-4

Tel.048-680-1891 Fax.048-680-1894